国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成23年3月1日発行　第35巻第3号通巻第402号

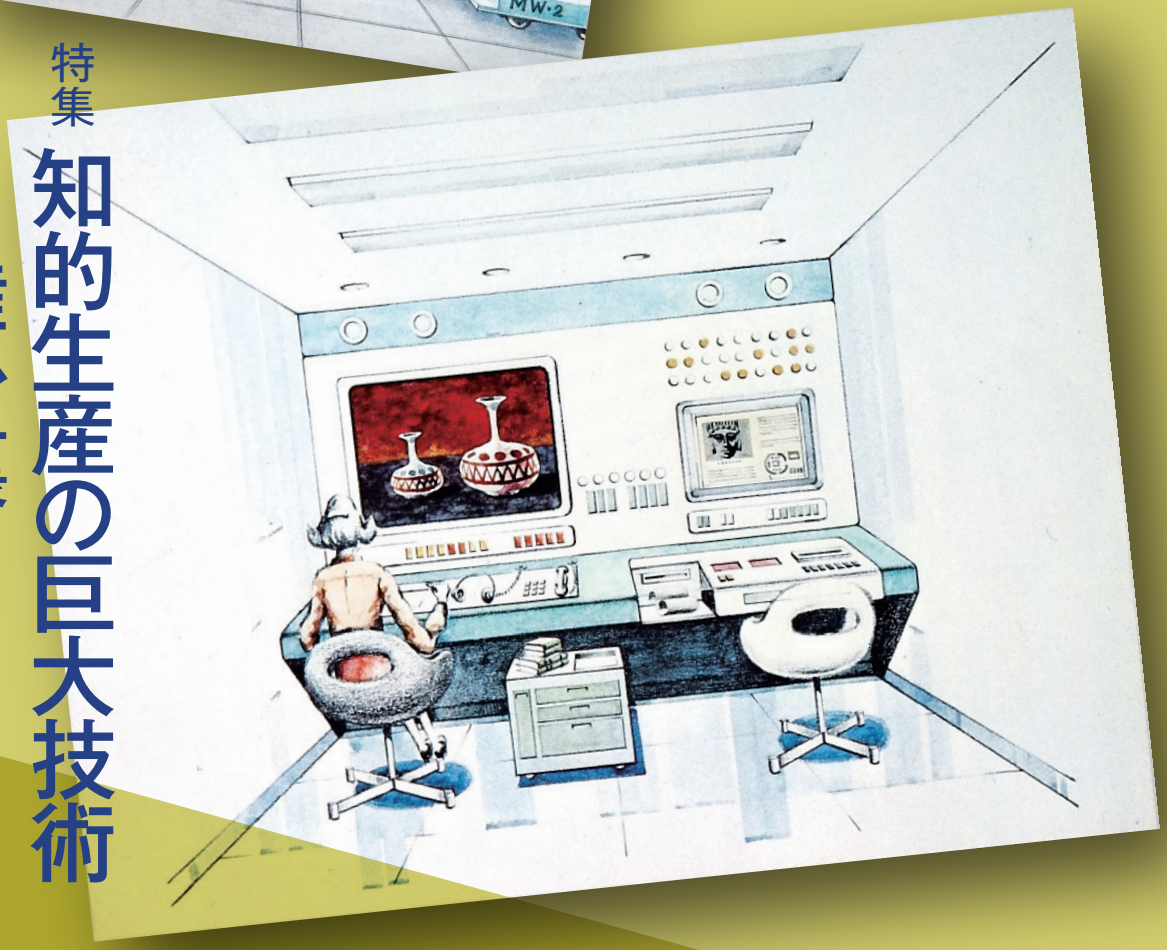
月刊みんぱく

2011 3月号

特集

知的生産の巨大技術

その舞台裏



エッセイ 千字文

或る生還

平出（ひらいで） 隆（たかし）

プロフィール
1950年福岡県生まれ。詩人。多摩美術大学教授。詩集や小説のほか、『ベースボールの詩学』（講談社学術文庫）、『遊歩のグラフィスム』（岩波書店）などの評論がある。最近、極小出版活動《via wwalnuts》を展開中。

四十八年前に卒業した小学校で、六年生を相手に、一齣（ひとこま）だけ授業をすることになった。半島の要に位置する山裾の校舎は、今年度限りで取り壊され、建て替るという。私が学んだころには新校舎だったから、最初と最後を見つめることになった。廊下の窓からは海峡が一望の下にあり、教室の窓からは山側の運動場が見える。ここで私も、体育の授業や昼休みの遊びで身体を動かしたんだよ、と子供たちに話しながら、窓の下、不規則な模様をなして運動場を駆けめぐる低学年の児童たちを眺めた。

子供と接する機会が日頃から少なく、戸惑いもあった。しかし、滅多にはない機会なので、これしかない、という話にしようと思った。生れたのはあそこの神社の近く、育ったのはあの山間の新興の市営アパート、造成予定地で大人も女の子も一緒にする草野球を覚えて、この小学校に転校してきた。運動場には土俵があった。ボール遊びは公園での草野球のほか、住んでいた駅前の公団住宅の通路での「ロクムシ」。

この「ロクムシ」がひそかなテーマだった。二極の円の間を、ボールを当てられないように走って六往復しようとするチームと、キャッチボール六往復の完遂によって相手の六往復を阻もうとするチームと――両方が競う奇妙なボールゲームが、まだ遊ばれているかどうか。野球の起源を調べることになってから、ずっと気に懸ってきたあの幼年時代の遊びは、あれはラウンダーズ系なのか、クリケット系なのか。

あらかじめアンケートをとった。いま、どんな遊びをしていますか。その絵を描いて、ルールを説明してください。「ロクムシ」が残っていることをひそかに願って臨んだ授業だったが、直前に渡された集計では、それは影もかたちもなかった。

子供たちの遊びを描いた十八世紀イギリスの小さな絵本のページを、モニター画面に示した。「この絵本はみんなのアンケートそっくり。遊びの光景の絵と、ルールの説明をする四行詩とでできています。」

この『小さな可愛いポケットブック』によれば、ベースボールには、大海原に漕（こ）ぎ出し、世界を一周しながら財宝を獲て、喜び勇んで故郷に帰る船乗りの譬（たと）えがこめられている。「自分の遊びのルールを説明したことばを、四行詩に書き直してみてください。」

東京に戻ってしばらくすると、宿題が送られてきた。相変らずそこに「ロクムシ」はなかったが、説明のことばが、生き生きとした詩に変ろうとしていた。私は卒業式までに、一冊の絵本に造って贈ることにした。

月刊 みんぱく 3月号目次

1 エッセイ　千字文
或る生還　平出 隆

2 特集　知的生産の巨大技術 その舞台裏

5 思想の道具化と道具の思想化　篠原 徹
7 梅棹忠夫の映像へのまなざし　大森 康宏
8 梅棹アーカイブズと知的生産の技術　久保 正敏

10 研究フォーラム
人間は社会的動物か?
齋藤 晃

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
「壁」を崩せ
フランクフルトの「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」ミュージアム
廣瀬 浩二郎

フランクフルトの暗闇博物館体験記
山中 由里子

16 散策と思索の径
ブダペストの空気
長野 泰彦

18 多文化をささえる人びと
外国人集住地域のまちづくりの課題
――保見団地の取り組み
野元 弘幸

20 歳時世相篇
ディスカヴァリーデー
マゼランに「発見」されたグアム島
印東 道子

22 フィールドで考える
もうひとつのフィールド
緒方しらべ

24 次号予告・編集後記

特集

知的生産の巨大技術 その舞台裏

梅棹忠夫民博初代館長は、
知的関心を、生物学から民族学、そして比較文明学へと広げ、
集積した資料を駆使した知的生産は、
生涯を通じて止むことがなかった。
その世界を展開するのが、
三月一〇日から開催の特別展「ウメサオ タダオ展」である。
梅棹さん自身の発想に基づく知的生産の技術を
巨大なシステムとして実現したのが、民博の創設と経営である。
梅棹さんの掲げた民博の理念は、
現場ではどのように展開されてきたのだろうか。

標本管理ファイル。1件の標本資料に関する
さまざまな情報のカードを1ファイルに収める

京都大学　アフリカ学術調査隊（1963～64年）
におけるフィールド・ノートの表紙

知的生産を支える情報管理施設

『知的生産の技術』で示された考えは、民博の経営にも生かされた。そのひとつは、民博創設時に、既存の研究機関や博物館にはなかった新しい形態の組織、「情報管理施設」設立という形で具体化された。

民族学・文化人類学や関連する諸領域の学術研究に必要なさまざまな資料を収集し整理し、そこから始まる研究の成果もまた整理し、それらすべてを含めて、学界のみならず一般市民にも公開する施設として民博は構想された。

梅棹さんは、博物館も情報産業のひとつとみなした。なぜなら、収集した民族学関係の諸資料のなかから発見された研究成果を編集して情報を発信する手段が、学術論文であり展示でもあるわけだから、民博は情報を発信する情報産業に他ならない、と考えたのである。しかし、情報を編集するためには、さまざまな資料を整理し情報を編集できる基盤を作らねばならない。そのための組織が「情報管理施設」である。

本誌一九七八年五月号に掲載された、当時の木田宏・文部事務次官と梅棹館長との対談にそのねらいが語られている。そのなかで、梅棹さんは、個人レベルを扱った『知的生産の技術』を壮大なレベルで実践する組織として立ちあげた、と述べている。

この「情報管理施設」の名前は、創設に先立つ一九七一年五月に設置された「民族学研究博物館に関する調査会議」が翌年一月にまとめた概要に初めて登場する。民族文化資料室、分析試験室、録画・録音室、電子計算機室、標本整備室、展示技術室などからなる組織が構想された。すなわち、現在にいたる資料の三区分、標本資料、映像音響資料、文献図書資料、のそれぞれに対する資料管理と情報サービスを担う施設として設立されたのである。それらのすべてがコンピュータ利用を前提に考えられていた。

最終的には一般市民や学界に提供される情報サービスを担う舞台裏のようなこの施設が、じつは民博の屋台骨のひとつなのである。

実際に、この「情報管理施設」（以後、情管と略す）が作られ運用されるなかで、梅棹理念がどのように具現化していったのか、それは、知的生産の技術を組織的に具体化していく過程である。

創設当初からこの組織にかかわった人たちは団塊の世代、すでに民博をはなれた方もおられるが、民博の誕生から三〇年以上も情管を支えてきた、飯島善明、宇治谷恵、宇野文男、鈴村明、田上仁志の五名の人たちに、あらためて梅棹理念の具体化の経緯を聞いた。

梅棹理念の浸透

民博の基本構想は一九七二年五月にまとめられたが、その骨子は民族学の研究所、資料や情報のセンター、市民に研究成果を発信する展示場、三つの機能を合わせもつ大学共同利用機関とすることである。その背景には、既存の博物館の姿にとらわれない新しいタイプの博物館像を作りあげること、世界でも一流の機関を目指すこと、という梅棹さんの大きな理念があった。

梅棹さんは、自分の理念をさまざまな機会に公にするとともに、それらを民博の全スタッフに浸透することを心がけた。本誌の創刊号以来、巻頭で続けられた一八二回におよぶ館長対談も、自らの理念を語る場であった。

その一部は『民博誕生』などにまとめられて館員に配られ、その後赴任した館員にも、著者謹呈の文言入りの書籍が、「民博の教科書だよ」といわれながら手渡された。また、本誌昨年一〇月号の表紙で紹介した五カ条の民博

『知的生産の技術』
梅棹 忠夫　著　岩波新書（岩波書店）

刊行は1969年、現在86刷、累計136万部、いまだに読み継がれている。カードを使った情報整理の指南書としてとらえられがちだが、その神髄は、自分の脳で解釈した情報を小わけに記述・整理し、それを繰り返し組み替えるなかから情報のあいだの思わぬ関連性を発見し、あらたな情報を生み出し、ひとにわかる形で提出することが知的生産である、と説いた点である。そこには既に、来たるべきコンピュータ時代にこそ有効な考え方であるという確信があった。
※写真は初版本

理念、すなわち、「ふかい学識、ひろい教養、ゆたかな国際性、柔軟な実務感覚、ゆきとどいたサービス精神」も、梅棹さんと直接話す機会の少ない情管スタッフにとって、梅棹理念を理解するバイブルとなった。

また、後発の博物館であるゆえに、今までにない世界の一流を目指すという熱気も、館員全員に共有されていた。研究経営に関する梅棹さんの理念はよく語られてきたが、博物館経営という点から見ても、著書や講演などさまざまなメディアをとおして、自らの理念を館員に浸透させるという方法で、すべての館員を牽引(けんいん)していったのである。

1980年代中ごろのコンピュータ・ルーム。大きな汎用コンピュータと磁気テープを使っていた

情報化のバイブル

一九七四年に創設された時点で、情管は資料と情報の整理から発信までを担うとともに、研究活動の支援もおこなう組織と性格づけられた。

そして、研究機関であるという基本性格を踏まえて、学芸員を置かない組織として発足した民博は、博物館運営に関するノウハウをもち合わせていない教員と共同で資料の整備と情報化を進めるスタッフとして、情管に大きな役割が期待されたのである。

一九七四年、常勤職員すべてを合わせてもわずか三〇名で発足した民博は、一九七七年の展示場開館に向けて、文献図書資料や標本資料の収集・整理・情報化、展示の基本的な事項の決定など、急ピッチで多くの仕事をこなさねばならなかった。創設前後に加わった情管スタッフも、少人数なので資料の区分にとらわれることなく、相互に協力しながら仕組みを整えていった。

すべてのスタッフが、さまざまな委員会に正式に加わり、具体化の仕事を教員と共同で進める民博の慣行は、このときにできあがった。

資料の収集や映像取材なども、教員と情管スタッフが一緒に現地に出かけておこない、収集・整理・情報化のためのさまざまなシステムの設計や具体化についても、毎週開かれた教員も加わる「情報管理施設スタッフ会議」で進められたのである。

その際には、やはり『知的生産の技術』が大きな役割を果たした。既存の博物館が資料目録を台帳で作っていた時代に、同書を参考にしながら、また、近々導入されるであろうコンピュータ処理を前提に、目録カードや研究情報カードの項目の設計が進められた。標本資料や映像音響資料を棚に配置する方法についても、同書に述べられている「分類しない」原則が徹底された。これもコンピュータ化を前提とすれば当然のことであった。

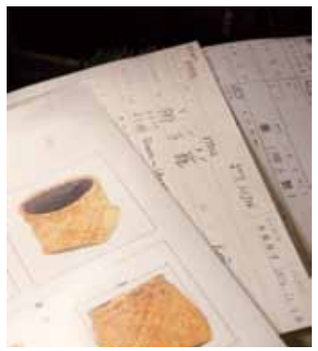
一九七六年、情管の組織は、資料室、技術室に大別され、開館に向けての体制が整った。

専門家との協業 専門知識をもつジェネラリスト集団へ

梅棹さんの理念のひとつに、専門家への信頼・信任がある。情報発信におけるアマチュアリズムへの期待は、『情報産業論』などでも語られているが、その一方で、プロ、それも一流のプロに任せるべきは任せる、という姿勢は、博物館経営でも一貫していた。理念を館員に示すが、その具体化は担当セクションを信頼して任せる、そして一流の専門知識集団を外部委員として招き、専門

標本資料収蔵庫での点検作業

借用資料を借用元の学芸員とともに点検する



標本資料の写真カードや情報カード

思想の道具化と道具の思想化

篠原 徹(しのはら とおる)　滋賀県立琵琶湖博物館館長

おそらく戦後の日本で自らの思想や学問をもっとも明晰(めいせき)な論理で展開し、実践性を備えたものにしたひとりが梅棹忠夫であろう。その実践性とは思想や学問あるいは研究の可視化といえるあらたな情報産業理論に支えられた博物館の創造であった。梅棹忠夫の情報産業理論からいえば、創造される博物館は世界の民族文化の理解のための装置であり、宝物を拝観させる宝物殿ではなかった。梅棹忠夫の論理がしばしば演繹(えんえきてき)的であることは、彼の多くの著作にみられる傾向である。だから民族文化理解の装置の部分たる展示物は、演繹的に結果としてショーケースに入れずに露出展示の方法を採用したのは当然の帰結であった。いまどきはそれを展示物のハンズオン手法としてさまざまな博物館や美術館が部分的に採用しているが、一種の流行りであり、悪くいえば観客中心主義への迎合である。

梅棹忠夫の実践性でもうひとつ重要なことは、学問や研究の世界に経営という視点をもち込んだことであろう。梅棹忠夫の思想や学問の根源に生物学（生態学）と探検があることを否定する人はいないであろう。生態学とは生物の生活の科学とか生物の家政学ともいわれる。生態学とは自然の経済学でもあり、経営とか生存戦略は梅棹忠夫の学問には元来なじみやすいことばだったのではないだろうか。

もうひとつの根源である探検においては失敗することは死を意味するので、鑑賞用の道具など必要はないし、あらゆる道具は使いこなさなくてはならない。探検や登山は発見や登頂という明確な目的をもっている。全体の計画をストラテジー（戦略）というなら、探検や登山を成功させるかどうかは地図や磁石やピッケルやハーケンという個々の道具の使い方である。それはタクティックス（戦術）といってもいいだろう。民族文化理解のための博物館の経営戦略が情報産業理論なら、露出展示は経営戦術に相当する。梅棹忠夫の博物館の露出展示は、彼が思想を道具化し、道具を思想化（露出展示はその一部）する達人であった故に可能なもので、通常でいうところの思想なきハンズオン導入の先駆者とは異なると思う。民博の露出展示の内外に与えたインパクトは、諸民族の道具を露出展示という形で思想化して提示したことであり、ハンズオンという展示手法などに矮小(わいしょう)化されるのは迷惑な話であろう。

収集資料を教員と情管スタッフが協力しながら点検する

的な技術開発も外部のプロ集団に任せ、そこから館員は学ぶ、という姿勢である。それを受けて、情管スタッフには、プロと民博教員との仲介機能が期待された。専門知識集団から学んだ専門知識をもって、具体の技術開発を任せる外部プロとさまざまな折衝・調整にあたる、コーディネータとしての役割である。

創設当初、あくまでも情報整備をおもな任務とする情管は展示を担当しておらず、管理部に置かれた展示係が担った。もちろん、管理部にも展示のノウハウはない。そこで、建築やデザインなど、展示にかかわる一流プロが委員会メンバーとして参加して検討を進めるスタイルをとったのである。それに参加した外部の展示技術者集団もその後進化して、現在では日本における展示関連会社の雄になったこともよく知られている。梅棹さんは、展示も情報の編集に相当するから展示学が成立すると考えて、その研究を促進するために日本展示学会の創設にたずさわった。

コンピュータ・システムの導入についても、その道の一流専門家や研究者を迎えた委員会が牽引役となって方向を決め、それを受けた情管スタッフが館内教員と協力しながら技術開発業者とのコーディネータ役を果たしてきた。

情管スタッフも、こうした委員会や会議に参加しプロから専門知識を学んでいくとともに、外部の専門家との人的ネットワークを作りあげていった。そのなかで、専門知識を備えたジェネラリスト集団へと成長せよ、と梅棹さんは情管スタッフに呼びかけたのである。それは、梅棹さんが教員に向けて語った『研究経営論』にも相通じる。専門に閉じこもるのではなく、研究組織をコーディネートし、研究資金を工面し、専門領域だけではなく広く市民に研究成果を発信する能力を研究者に求めたが、それは館員すべてにとっての呼びかけでもあった。

映像の自主制作

一九七五年にビデオテークの開発が始まり、開館までに三〇〇本の映像番組をそろえるという大号令のもと、映像音響資料の収集が本格的に進められた。そのなかで生まれてきたのが、左のコラムにあるとおり、映像の自主制作という方向性である。スタジオ設備は当初の建築計画にも盛り込まれていたが、民博における新しい研究の目玉のひとつとして映像民族学を育てていきたい、という梅棹さんの思いもあって、本格的な映像編集スタジオへと設備が整えられていった。これと同様に、当時の国立機関には存在しなかった、教員による国内外映像取材の仕組みも、試行錯誤しながら作りあげられていった。取材には、教員だけでなく情管スタッフや映像のプロが同行する仕組みである。必ずしも映像制作ができるわけではない教員が監修する映像取材では、制作するスタッフが撮影現場の文化背景をわかっていないとその後の映像編集が不可能だからである。ここにも、プロとアマの共同作業という観点が貫かれている。

さまざまなメディアを保存・管理する映像音響資料収蔵庫

取材した映像の編集と内容の記録作業。1980年ごろ

海外から研究者を招きパフォーマンスをスタジオで収録する。1980年ごろ

梅棹忠夫の映像へのまなざし

大森 康宏（おおもり やすひろ）　立命館大学教授、民博 名誉教授

わたしが民博に勤めることになったきっかけは、梅棹さんのビデオテーク構想である。梅棹さんは元来、文章の人である。読む人がいろいろなイメージを作り出せる文章の力を生かしてきた。しかし、民博創設に当たり、これとは逆に、イメージから物事を考える映像の仕掛けを実現できないかと考えた。そして放送とはまったく逆に、観覧者が自由に映像を選べるビデオテークを構想した。梅棹さんは、映像機器を展示に導入している数多くの博物館を視察したうえで、モノへの集中を損ねないように映像展示は別の場所に置くことに決めた。

提供する番組をどのようにして作るかに関しても、当初は大きな議論があった。外部に制作を任すというのが当時の文部省も含め大勢の意見だったが、映像制作会社にも関与していたわたしは、映像が著作権のかたまりであることを良く知っていたので、将来、自由に映像を複製、改編、上映するためには、民博自身が映像を自主制作し著作権をもつことが大事だと説いて回った。博物館における情報提供の大きな柱として映像を育てていきたいと考えていた梅棹さんも賛同し、民博が自ら映像を作る現在のシステムが出来上がった。実際、映像制作を外部に任せた多くの博物館や研究機関では、導入後十数年たって蓄積媒体を移行するための複製だけでも高額な著作権使用料を請求されて苦労しているのを見れば、民博の先見性が見て取れる。

映像を自主制作するにあたっても、作る側の主張を込めたプロパガンダ映像やジャーナリスティックな映像作りを避ける方向を梅棹さんは目指した。観覧者が展示を見て自ら現地の生活や文化を発見するのが、梅棹さんの構造展示の理念だったが、映像展示についても同じことを狙ったのである。この点は、映像を撮る側にとっても同じだ。撮影者が現地の日常生活を撮り、それを何度も見直すなかから文化について何らかの発見をし、それを検証するためにまたフィールドに戻る、という映像民族学の理念も、まさに梅棹さんの知的生産の技術の考え方と同じ方向であり、これにわたしも共感したのだ。

ホロテーク構想もそうだが、梅棹さんはあらゆる情報を連動させて検索・視聴するなかから、さまざまな発見があり、それが知的生産につながると考えておられた。その意味では、民族学の原点である物質文化研究と、目に見えない声の文化や身体性をあらわすことのできる映像の力とを連結する方向性が、今あらためて求められているとわたしは思っている

梅棹アーカイブズと知的生産の技術

久保 正敏（くぼ まさとし）　民博　文化資源研究センター

民博には、梅棹さんが残されたアーカイブズ資料がある。自分の知的生産活動から発生する情報すべての記録であり、大きくは下記のとおりである。

（1）自ら生産した情報：著作、直筆原稿、フィールドノート、スケッチ、写真、カード類、スケジュール帳
（2）生産物に対して外部から結びつけられた情報：引用、紹介、批評、言及
（3）自分に外部から届いた情報：手紙やDM

今後、これらの整理が進められるだろうが、それは、梅棹さんの探検や研究、民博設立構想など、日本の民族学研究史を探るという視点での研究活動でもあるとともに、梅棹さんの知的生産の考えと実践を探る機会ともなる。

梅棹さんは『知的生産の技術』のなかで、「覚えるためではなく、忘れるためにカードを作る」と名言を述べておられるが、梅棹アーカイブズは忘れるために残しておかれた資料類であり、いわば、梅棹さんの脳を外化したものといえる。

実際、これらメモや資料類を活用されて数多くの著作をものされたし、失明されてからも「月刊梅棹」とよばれるほどに活発な著作活動を続けられたのも、外化されたアーカイブズがあったからだ。おそらく梅棹さんは、素材から始まる知的生産、外部との相互作用の情報、それをまた生産に生かす、という繰り返しの過程として生産活動をとらえておられたのだ。

梅棹さんは、知的生産とは、情報間の関連性、あらたなリンクの発見から生まれると考え、これは誰にでもできることである、だから情報産業はアマチュアリズムが根底にある、と考えられた。生物学アナロジーによる産業史のユニークさに焦点が当てられる『情報産業論』ではあるが、このアマチュアリズムも重要なポイントだろう。

梅棹さんは、情報産業のひとつとしての民博の創設と運営に後半生を捧げられたが、展示については、観覧者にとっての知的生産の場たることを目論（もくろ）み、構造展示の考えを示された。観覧者は展示を回遊しながらモノとモノとのあいだにある構造的・機能的連関を自ら再構成してほしいと希望した。すなわち、展示場とは、観覧者が情報のあいだの関連性を自ら見出して構造を把握し、自ら知的生産する場、と位置づけたに違いない。情報の編集、創出と、その受容から始まるあらたな情報創出という、展示を作る側と観る側のサイクリックな相互作用の場が展示というわけだ。

こうしてアーカイブズから展示にいたるまでを見ると、梅棹さんには、資料や情報を不断に組み替えるなかから、それらのあいだにある関連性を自ら発見することが知的生産である、という一貫した考えがあったのだろう。

梅棹美学の実践

一九八一年の講堂完成、一九八九年の特別展示館完成に合わせて、一九八九年には、資料の受入から展示までを一貫して担うべく情管が改組された。これらの施設を活用して、民博は展示だけでなく研究公演やさまざまなイベントを開催してきた。その際に、イベント業者や展示業者とのあいだに立つ情管スタッフには、梅棹さんの美学が浸透していた。がらくたを集めて展示するという梅棹さんのことばを真に受けて、がらくた然と展示しては、一流の展示としては失格である。入館者に感動や驚きを感じてもらうには、照明や資料の配置、造作にも工夫が必要だ。講堂を使った公演や講演会、特別展における関連催し物においても、舞台設定や小道具など、テーマに応じた演出が求められる。

このように、市民に向けたサービスにおいては一流としての品質を保つこと、さらにはそれを支える機材や設備のメンテナンスも、情管のスタッフが心がけ、また後輩スタッフを指導してきた点である。

ノウハウと知識を次世代に伝えるには

民博は開館後も、常設展示場の相次ぐ増築、コンピュータ・システムの更新や新開発など、次々と新しい事業を展開してきた。コンピュータ・システムに関して見れば、三区分に対応するあらゆる資料の情報を蓄積し提供するシステムを実現しようと、数年次の情報システム整備計画が次々と立ちあげられてきた。一九八三年度末に立ちあげられた「情報システム構想委員会」では、その最終形として、映像に対するビデオテーク、写真に対するフォトテーク、音響音声に対するフォノテーク、文献図書に対するビブリオテークをすべて統合した「ホロテーク」という名称が唱えられ、その実現に向けて、教員だけではなく情管スタッフが邁進（まいしん）することになった。この構想自体、創設に先立つ一九七三年の段階で構想されており、さらに元をたどれば、『知的生産の技術』に行き着くといえよう。

息つく暇もなく、情管スタッフはこうした仕事の具体化を担当してきたが、常にアバンギャルドたれ、という梅棹さんの号令が心の支えとなっていたのである。

他の機関では例の少ない情管というユニークな組織は、代々のスタッフによって支えられてきた。しかし、現在そこには、人事制度の壁という大きな問題がある。教員組織ではない情管は、事務職と同様に他機関との人事交流により昇進するというシステム下にある。しかし、ユニークな組織であるだけに、交流相手の機関が見つからない。永年にわたり情管を支えてきた五名の人たちはいずれも、梅棹理念に共感し、栄達を求めず、ひた走ってきた。ところが、これらの人たちに蓄積された知識やノウハウを次世代に継承するシステムがいまだ確立していない。事務職の人事システムとは異なる、専門知識をもったジェネラリスト集団が永続的に知識とノウハウを継承できる仕組みを考えていかないと、充分な博物館活動ができなくなる恐れもある。

それとともに、世界第一級の博物館を目指すという梅棹理念をあらためて味わい、現代に適応した民博はどんな姿なのか、じっくり考える必要があると思われる。

（久保 正敏　民博 文化資源研究センター）

特別展示館で２０００年３月〜５月に開催された「みんぱくミュージアム劇場――からだは表現する」。会場で毎日おこなわれたビズビニ・ファミリーによるパフォーマンス。その演出にも情管スタッフがかかわった

民博が公開しているデータベース。
所蔵資料（標本、映像音響、文献図書）をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果の情報を検索することができる。ホームページから利用することができる

文献図書資料を収蔵する開架式書庫

映像資料を楽しむことができるビデオテーク

研究フォーラム

人間は社会的動物か？

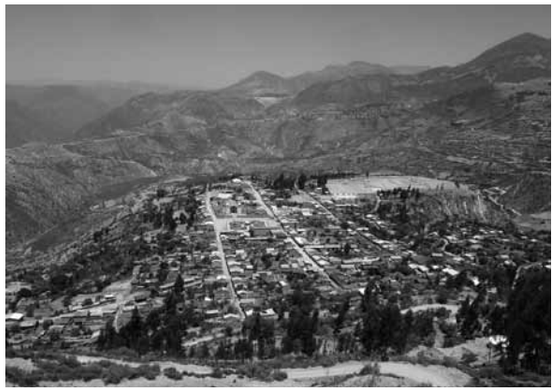
齋藤 晃（さいとう あきら）
民博 先端人類科学研究部

人工的に整備された街並、そびえ立つキリスト教の聖堂。
かつて抵抗したはずの植民地政策の残像が、今もアメリカの先住民の暮らしを取りかこむ。
コロンブスの航海以降、先住民たちは西欧の人間観をどのように受けとめてきたのだろうか。
３年間にわたるあらたな研究プロジェクトがはじまった。

人間観の多様性

人間が人間である条件とは何だろうか。どのような条件を満たせば、人間は人間としてみとめられるのだろうか。人間とは潜在的な存在である。生物学的に人間であっても、それだけでは人間社会の仲間入りはできない。人間にふさわしい能力や資質を身につけなければ、真の人間とはみなされない。それでは、真の人間、人間らしい人間とは何か。おそらくこの問いには、時代や地域によってさまざま答えがありうるだろう。この人間観の多様性は、人間の可塑性や創造性のあらわれなのだが、人間同士の対立の原因ともなりうる。

一五世紀末のコロンブスの航海以降、アメリカに渡ったスペイン人は、人間の条件について比較的均一で明確な考えをもっていた。たとえば、服を着ていることである。この点で、アメリカの住民の多くはおよそ人間的ではなかった。裸体をさらすことへの羞恥心の欠如は、アメリカが地上の楽園であり、その住民が原罪を免れていることのしるしと解釈されることもあったが、多くの場合、彼らが人間以下の存在、すなわち「野蛮人」であるあかしとみなされた。実際、先住民のもとに派遣されたキリスト教の宣教師が真っ先に取り組んだことのひとつは、綿花を栽培することである。



ペルー山岳部の先住民の町。植民地時代の大農園主の領地に建設された（2010年撮影）

人間の条件としての社会性

ここで紹介する研究プロジェクトは、スペイン人がアメリカの住民に課した別の人間の条件、すなわち社会性に注目する。古代ギリシアの哲人アリストテレスは、人間は本性上、寄り集まって社会をつくると述べたが、この人間観は近世スペインでも大きな影響力をもっていた。当時の考えでは、社会をつくることは人間の生存にとって必要不可欠であり、それゆえ人間の本性にかなったことである。人間は生存に必要な装備や能力、知識を備えて生まれてくるわけではないので、助け合うことで生存のチャンスを高める必要がある。人間はまた、無力な幼年時代が長く続くため、年長者が年少者を保護してやらねばならない。人間が社会的動物である所以である。

それでは、アメリカの住民はどうか。アステカやインカのような国家の存在にもかかわらず、アメリカに渡ったスペイン人は、先住民の社会性の欠如を強調している。いわく、先住民は数多くの小さな集落にわかれて暮らしている。それらの集落は互いに敵対しており、戦争が頻繁である。首長はいるが、強制力をもたず、各人が勝手気ままに振る舞っている。家族の絆（きずな）はもろく、妻は夫に、子どもは親に従わない。言語はいちじるしく多様で、意思疎通を妨げている、云々。要するに、アメリカの住民はいまだ社会をつくることをしらず、共同生活の利益を享受できないまま、野獣にも等しいみじめな生活を営んでいる、というわけである。

ボリビア低地の先住民の町。植民地時代には宣教師のつくった町だった
Alcide d'Orbigny, *Voyage dans l'Amérique méridionale*, vol.8, P.Bertrand et V.Levrault,1845.

アメリカにおける集住政策

スペインによるアメリカの植民地化は、先住民をキリスト教徒にするに先立って、まず彼らを「人間にする」ことを目指していた。そのための方策が、このプロジェクトのテーマである集住政策である。これは、広い範囲に散らばって暮らす先住民を、計画的につくられた大きな町に強制移住させる政策であり、一六世紀以降、スペイン領アメリカ全土で実施された。町は碁盤目状に区画された人工的な空間であり、中央には広場が、その周囲にはキリスト教の聖堂や役場、学校などが立ち並んでいた。町に集められた先住民は、役人や司祭の監視下、秩序正しい社会生活を営み、人間にふさわしい礼節を身につけることを期待された。

集住政策の実施はアメリカの住民に多大な否定的影響をおよぼした。町への集住化は、多様な自然資源の利用を妨げ、伝染病の蔓延（まんえん）を助長し、社会組織をかき乱し、自然景観と一体化した在来宗教の実践を困難にした。先住民は集住化に抵抗し、出身の集落に舞い戻ったり、都市や鉱山に逃亡したりした。そのため、町の人口は急速に減少し、危機感を覚えたスペイン人は、再集住化の命令を繰り返した。集住化の必要性が疑われることはなかったが、政策が期待された効果を上げていないことは、誰の目にも明らかだった。

しかしながら、今日の先住民の町を訪れると、植民地時代の集住政策のまぎれもない影響がみてとれる。直行する街路、方形の中央広場、そびえ立つキリスト教聖堂などである。この事実をどう解釈すべきだろうか。集住体制下、先住民はスペイン化を余儀なくされたのだろうか。それとも、集住政策が先住民により骨抜きにされ、彼らに好都合なかたちに変えられたのだろうか。社会的動物というスペイン人の人間観は、先住民によりどう受け止められ、どのような帰結を招いたのだろうか。

プロジェクトはまだ始まったばかりである。三年の研究期間を通じて、これらの問いへの答えを探っていきたい。

科学研究費補助金　基盤研究（B）
「旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較」
2010年4月～2013年3月
代表者：齋藤 晃

みんぱく
Information

特別展

「ウメサオ タダオ展」
みんぱく初代館長・梅棹忠夫の軌跡をたどり未来をみつめる特別企画展

日本のどのような問題も、日本だけでは解決できない、そんな現代だからこそ、世界への知的好奇心は欠かせません。世界中をあるき、さまざまな感動を記録した、梅棹忠夫の生涯を、みんぱくで「探検」してください。そして、世界へのあくなき好奇心をお持ち帰りください。

会期　3月10日（木）～6月14日（火）
会場　特別展示館

■関連イベント

企画展
「民族学者　梅棹忠夫の眼」
梅棹忠夫が、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら46点を選び、国内各地で開催した写真展「民族学者　梅棹忠夫の眼」を再現します。
会期　3月3日（木）～6月14日（火）
会場　本館展示場内
※特別展関連のみんぱくゼミナールや名誉教授が登場するみんぱくウィークエンド・サロンについては13ページ、24ページをご覧ください。

オセアニア展示・アメリカ展示オープン
3月17日にオセアニア展示・アメリカ展示が生まれ変わります。あらたなオセアニア・アメリカを体感してください。

**「春のみんぱくフォーラム2011
――ことばの世界へ」**
会期　開催中～3月31日（木）

■関連イベント

◆公開講座
「ことばで世界一周」
世界各地のちょっとめずらしいことばの入門講座。90分で完結する講座を23言語で開催します。
時間　13時～14時30分（ただし3月6日（日）は11時～12時30分）
定員　各講座30名（高校生以上の方対象）
※参加無料、要申込
※各講座の申込状況などについてはホームページでご確認ください。

◆特別講演
「ことみたろう　ことばをかたる」
ことばで絵の世界を表現してこられた絵本作家五味太郎さんにそのゆたかな言語観をことばで描いていただきます。
日時　3月6日（日）15時～16時30分（開場14時30分）
場所　講堂
定員　450名
※参加無料、申込不要（先着順）

国際シンポジウム
「『日常』を構築する――アフリカにおける平和構築実践に学ぶ」
日時　①3月5日（土）13時～17時（講堂）
②3月6日（日）10時～17時5分（第4セミナー室）
※参加無料、申込不要
お問い合わせは左記メールアドレスにお送りください。
suzuki-cr@dc.minpaku.ac.jp

国際シンポジウム
「世界の捕鯨文化の過去、現在、そして未来」
人類とクジラとの関係は歴史的に大きく変化してきました。世界各地の捕鯨文化の過去、現在、そして未来について紹介し、検討します。
日時　3月13日（日）13時10分～16時30分
場所　第5セミナー室
※参加無料、申込不要
お問い合わせ
岸上研究室
電話　06:6876:2151（代表）
FAX　06:6876:2160（研究部）

公開ダンスワークショップ
「インド刺繍～思いと出会う・願いでつながる」
インド西部の刺繍との出会いをもとに、ダンス表現を創り、発表するワークショップです。
日時　3月19日（土）13時～17時
3月20日（日）10時～15時
場所　第5セミナー室、第7セミナー室など
※要申込（見学は自由です。詳細はホームページで）

春のこどもワークショップ
「紡ってなに？――糸を括って、染めて、織ってみよう」
紡（かすり）と呼ばれる技法で小作品をつくりながら、世界各地の染織技法の特徴や文様について学びます。
日時　3月21日（月・祝）10時30分～16時
定員　12名（小学4年生以上の方対象）
※要申込（詳細はホームページで、材料費の実費500円が必要です
お問い合わせ
情報企画課展示グループ
電話　06:6878:8532

みんぱく春の遠足・校外学習・事前見学&ガイダンス
春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。生まれ変わったアメリカ・オセアニア展示についても研究者が展示場で説明します。
実施日　4月5日(火)、4月7日(木)、4月8日(金)
時間　14時～17時
場所　第5セミナー室ほか

申込方法
みんぱくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。
お問い合わせ
広報企画室広報係
電話　06:6878:8560

●無料観覧日のお知らせ
3月13日（日）は万博公園ふれあいの日のため本館展示・特別展を無料で観覧いただけます。

＊詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。
＊お問い合わせの受付時間は平日9時から17時です。

刊行物紹介

■小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編
『中国における社会主義的近代化――宗教・消費・エスニシティ』
勉誠出版　定価：4,200円
中国の人々はどのような価値観を持ち、いかに日常を生きているのか。隣国理解のための最大の鍵である「社会主義」という多面体を、宗教・信仰、消費システム、少数民族問題というアプローチから、民衆の暮らしのなかに読み解く。常に最大の関心事である中国と偏見なく対話するために、私たちは「他人」になることをやめよう。

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。）

第394回　3月19日(土)
【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
みんぱく誕生
講師　佐々木高明（国立民族学博物館 名誉教授）
聞き手　小長谷有紀（国立民族学博物館 教授）
みんぱく初代館長・梅棹忠夫の軌跡をたどり、その思想の先見性と行為の実効性を再発見する特別展を開催します。この展示にちなんで、佐々木高明二代目館長を招き、創設前夜についての話を聞きながら、私たちに託された未来を考えます。

第395回　4月16日(土)
【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
霊長類学からみたウメサオタダオの文明論
講師　山極寿一（京都大学 教授）
梅棹忠夫の名著『文明の生態史観』は、現在の先史学や霊長類学の発見と照らし合わせてみても、その輝きは失われていません。人間共同体の歴史を生活様式の変化ととらえ、生態学の遷移概念を用いてそこに段階的な法則を見出そうとしたところが新しい発想でした。それを、人類の進化と自然に学ぶ市民力の歴史としてとらえ直してみます。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第394回　4月2日（土）14時～15時
【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
ウメサオタダオのすべて
講師　小長谷有紀（国立民族学博物館 教授）
梅棹忠夫先生は、35,000点を超える写真をはじめ、スケッチやカードなどあらゆるものを記録としてのこされました。この膨大なアーカイブを「発掘」してゆくと、梅棹先生の思考形成、知的生産の過程をうかがい知ることができます。この作業はまさに「ウメサオタダオ」の世界を「探検」することでした。この「探検」の中から見えてきた成果をお話しします。
※講演会終了後、見学会があります。

東京講演会

第96回　3月26日（土）14時～15時30分
【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
『梅棹忠夫　語る』の背景
講師　小山修三（吹田市立博物館館長、国立民族学博物館 名誉教授）
会場　埼玉大学東京ステーションカレッジ
定員　80名（要申込）

第97回　4月30日（土）14時～15時
【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
梅棹忠夫の人となり
講師　石毛直道（国立民族学博物館 名誉教授）
会場　東京都中小企業会館講堂（銀座）
定員　130名（要申込）

第78回民族学研修の旅
遥かなるビザンツ文明の現在
――民族と宗教のモザイクの歴史をひもとく
5月12日(木)～25日(水)　14日間
訪問先：ブルガリア、マケドニア、ギリシャ、トルコ
古い修道院やモスクをはじめ、マケドニアの街並みなど世界遺産も数多く残るバルカン地域を訪ね、多文化、多民族が共存してきた歴史をたどります。
※詳細は上記「友の会」までお問い合わせください。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

大風呂敷と小風呂敷

「いろは紋」や「四季紋」で知られる染色家、芹沢銈介によるデザインの風呂敷をとりそろえています。カバンにしのばせてエコバッグとして利用するだけでなく、壁掛けやテーブルクロスなど、インテリアにとりいれてもおしゃれです。新生活をはじめられる方や外国の方への贈り物にもおすすめです。日本の伝統文化が息づく風呂敷を、すてきなアイディアで使いこなしてみませんか。

55cm幅	1,050円
70cm幅	1,575円
100cm幅	3,150円　など

「壁」を崩せ

フランクフルトの「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」ミュージアム

廣瀬 浩二郎（ひろせ こうじろう） 民博 民族文化研究部

「壁」を飛び越えるしたたかさ、しなやかさ

一九八九年の「ベルリンの壁」崩壊は、大学生だった僕にとって衝撃的なニュースであり、現在では世界史を変えた出来事として教科書等でも記録されている。同じ年、ドイツのフランクフルトで「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」（DID）という暗闇体験ワークショップが始まった。DIDは、いわゆる健常者と障害者のあいだに横たわる「壁」を崩すユニークな試みとして、ヨーロッパを中心に世界各地に広がっている。すでに全世界で七〇〇万人を超える来場者が暗闇体験を楽しんだという。日本においても東京で長期開催されており、常設化をめざす地道な活動が展開している。

DIDはアンドレアス・ハイネッケ博士によって考案された。一九八六年、ハイネッケ氏はラジオ局に入社した若い視覚障害者の教育係となり、「見えない世界」と出会った。当事者との日常的な付き合いのなかからポジティブな視覚障害観が生まれ、彼の心の「壁」の崩壊がDIDの着想へとつながるのである。DIDの特徴は、「視覚を使えない不自由」ではなく「視覚を使わない自由」を体感することといえよう。

開催地リストが記された壁面

DIDでは光を遮断した暗闇の空間で来場者がさまざまな経験をする。暗闇の案内役となるのが視覚障害者である。普段の生活では晴眼者が視覚障害者を誘導するのが当たり前だが、暗闇に入るとあっけなく立場が逆転してしまう。僕たちが常識として信じていること（「壁」）を飛び越えるしたたかさ、しなやかさを実感できるのがDIDの醍醐味（だいごみ）だろう。

視覚を使わずに聴覚や触覚に集中すると、見えないはずの物がみえてくる。視覚障害者は「全身でみる」極意を来場者に伝えるアテンド・スタッフの役割を担っている。闇とは、人間が本来もっている感覚の多様性を呼び覚ますための装置なのかもしれない。

フランクフルトのDIDは期間限定のワークショップではなく歴としたハコモノ

「壁」の向こうにあるもの

DIDの目的は、単に障害者理解を促進することだけではない。真っ暗闇のなかを七～八人の参加者がひとつのグループとなって歩く。アテンド役の視覚障害者の指示を頼りに文字どおり暗中模索する過程で、ごく自然にグループ内のメンバーは互いに声をかけ合い助け合う。外見や肩書きに惑わされないコミュニケーションが新鮮な感動をもたらす。DIDが国やことばの「壁」を超越し世界の人びとに受け入れられたのは、現代社会が人間らしいコミュニケーション、真の対話を必要としていることを示す証拠なのではなかろうか。

ヨーロッパではDIDのアテンド役があらたな視覚障害者の職業として注目されている。フランクフルトのDIDミュージアムには一四人の視覚障害スタッフが働いており、そのうち八人が全盲である。DIDにおいて、暗闇の創造的可能性を引き出す視覚障害者の存在意義は大きく、それだけに長期の研修に裏打ちされた柔軟性とプロ意識が求められている。

考えてみれば、「壁」を創るのも壊すのも人間である。文化人類学は多種多様な「壁」と真正面から対峙（たいじ）してきた学問ともいえる。僕はハイネッケ博士の慧眼（けいがん）に敬意を表する一方、文化人類学の研究成果に根ざす日本版DIDがそろそろ提案されてもいいのではないかと密（ひそ）かに期待している。

フランクフルトの暗闇博物館体験記

山中由里子（やまなかゆりこ） 民博 民族文化研究部

「壁」の向こうは本当に真っ暗だった。目をつぶったり、目隠しをしても、まぶたの裏には何らかの残像がちらつくものであるが、必死に目を見開いてもまったく何も見えないというのは、真の暗闇なのである。手を伸ばしてみても、何もない。宇宙空間に放り出されたような、「とらえどころがない場所にいる」という不安が襲う。

立ちすくんでいると、案内役の男性が落ち着いた、深い声で迎えてくれた。「わたしの声の方に来てください。」ぎこちなく声の方に進んでみると、ウールのセーターをまとった腕（？）にぶつかった。なんとも温かく、頼もしい手触りだ。

「それでは、左側の壁をつたって行って。前を触ってみてください。何がありますか。そう、水が流れていますね。はい、進んでください。吊り橋を渡りますよ。」

最初の部屋には、水が流れ、木が植えられ、ベンチやごみ箱が設置された公園が再現されているらしかった。真っ暗闇のなかでいきなり吊り橋を渡らされて、不安はいっそう募る。恐る恐る、慣れない白杖（はくじょう）で足元を確かめながら進む。視覚障害者であるガイドの男性にも何も見えていないのであるが、おろおろするわたしを誘導してくれる彼にはすべてが見えているのかもしれないという不思議な「錯覚」にとらわれた。同行した廣瀬氏のいう健常者と障害者の立場の逆転、「壁」の崩壊とはこのことなのかと、闇のなかで目からうろこが落ちた。

壁をつたって次の「音楽の部屋」に入ると、今度は「床に寝転んでください」とガイドがいう。ビートのきいたインド・ポップスが大音響で流れ、音楽に合わせて床がズンドコ振動し始めた。耳からだけでなく、体全体に浸透してくる軽快なリズムが刺激となって、こわばっていたさまざまな感覚が次第に解きほぐされてゆく。「暗闇は怖い」緊張感から「暗闇は楽しい」解放感へ。このめりはりのきいた空間構成が、視覚以外の感覚を呼び覚ます効果的な仕掛けになっているのである。

白杖の使い方に少し慣れ、声や音で方向や距離感がなんとなくつかめるようになってきたところで、街並みが再現された空間を歩いた。実物の車の形、横断歩道の音、市場の果物の匂いなどを確認しながらとおり、最後に暗闇カフェに入った。

カウンターの奥から声で伝えられるメニューを最初から最後まで記憶するのは、じつは至難の業である。何とか好みの飲み物を注文し、ポケットに用意しておいた小銭で払い、案内されたテーブルで、ガイドにツアーの感想を語りながらほっと一服。触覚・聴覚・嗅覚を駆使した冒険の終わりには、味覚へのご褒美が待っていたのである。次回は併設のレストラン「テイスト・オヴ・ダークネス」（暗闇の味）も体験してみたいものである。

闇の展示空間への入り口。ここで白杖を渡され、光源となりうる携帯電話や時計などをもち込まないといった「鑑賞」ルールの説明を受ける

散策と思索の径

ブダペストの空気

長野泰彦
民博 民族文化研究部

ブリュッセルでの会議の帰途、ブダペストを訪ねる機会をえた。わたしはチベット言語学を専門としているのだが、なぜブダペストか。ひとつは、私淑した言語学の恩師、徳永康元先生が一九四〇年代に二年半を過ごした場所であること。もうひとつは、欧州で初めてのチベット語文法を書いたケーレシュ・チョマ・シャーンドルがハンガリー出身だったからだ。

ブダペスト大学

ウラル学者で、マルチな才の文人

徳永先生は一九四八年から長く東京外国語大学で教鞭を執り、アジア・アフリカ言語文化研究所の所長（一九七二―一九七四）も務めた。ハンガリー語とウラル言語学が専門で、音論に関する手堅い論文があるが、文学・音楽・フォークロアに造詣が深く、我々学生にも「興味は広くもて」「三〇歳まで専門を決めるな」が口癖だった。先生が訳した『リリオム』（岩波書店）や『ラチとらいおん』（福音館書店）は今も版を重ねている。

随筆集『ブダペストの古本屋』、『ブダペスト回想』（いずれも恒文社）に書かれていることと、先生から直接伺った話を繋げると、先生の生活は、ドナウ川右岸のブダ側にあった学寮エトヴェシュ・コレーギウムを出て、左岸のペスト側にあったブダペスト大学（当時はパーズマニュ・ペーテル大学：現在の正式名称はエトヴェシュ・ロラーランド大学）文学部でさまざまのクラスに出席し、大学の隣の博物館通りに集中していた古本屋の書庫に入り浸り、その日にものにした本をカールパチア・レストランで楽しげに眺める、といったものだったらしい。

ブダペスト大学のウラル学のレベルの高さは周知のことだが、東洋学もむかしから充実している。明治三〇年代に東洋史学の白鳥庫吉博士が留学していたほどで、以来チベット学のA・ローナ・タシュやモンゴル学のL・リゲティらをも輩出している。労働や雑事から完全に解放されて、質の良い人文的な教養を存分に楽しめた時間は、徳永先生のその後の学問の、あるいは人間としての拡がりに決定的な影響を与えたと思われる。

ハンガリーは近世以降絶えず歴史の激動に翻弄されたのだが、先に述べた学寮も、大学も、古本屋も、レストランも全てそのまま、同じ名前で同じ場所に今も「ある」という事実に、わたしは妙に感じ入った。

『片目考―徳永康元言語学論集―』

『チベットのアルファベット』初版

博物館どおりの古本屋

菩薩になったチベット学者

ケーレシュ・チョマ・シャーンドル（一七八七?―一八四二）はトランシルヴァニアのケーレシュ村（現在はルーマニア領）の出身で、苦学して西洋古典を修め、ゲッチンゲン大学で勉学した後は郷里で教授職が用意されていた。しかし、ハンガリーの始祖と考えられていたフン族の起源をウイグルに求めるフィールドワークを志し、職を断って陸路東に向かう。一八一九年のことである。

一八二二年英国の文官W・ムーアクロフトから、A・A・ジオルジの『チベットのアルファベット』（一七五九／一七六二）を見せられ、たちどころにチベットの魅力にとりつかれた。以来一八三〇年まで主としてインドのラダク地方で研鑽を積み、チベット語文法の著述と辞書の編纂をおこなった。文法はチベットの伝統的文法学を祖述したもの、また、辞書はサンスクリット語とチベット語の対訳語彙集（*Mahāvyuttpatti*『翻訳名義大集』）の訳であったが、欧州人が直にチベット語に接した最初の業績で、近代のチベット学はチョマに始まったといって過言でない。「チベット語に《受け身》がない」ことに気づいたのもチョマである。この後彼はカルカッタのベンガル・アジア協会に招かれ、文法と辞書の上梓に漕ぎ着ける。協会の司書としてネパールから送られてくる膨大なチベット文献の整理をおこないながら、チベット仏教文化研究にスコープを広げていたが、ラサへ赴く途中ダージリンでマラリアに倒れ、亡くなった。

七年間ラダクの僧院で、厳しい環境のもと、清貧のなかに勉学を全うしたことが、その後のチョマの一二年間をさらに生産的なものにしたことは確かだろう。質素で禁欲的な生活態度は、アジア協会職員のあいだで今も「チョマは菩薩である」と語り継がれているほどである。

余談になるが、東京国立博物館にチョマの銅像がある。これも徳永先生に教えていただいたのだが、長らく忘れていた。アジア協会の胸像を模写したものかと思っていたが、意外にも印を結んだ僧形だった。「菩薩」なのだから、意外と思う方がおかしいのかもしれない。

東欧の地域的時間の保守性に身を委ねた体験が、ふたりの学者の学問にふくらみをもたせたと感じるのはわたしだけだろうか。

ケーレシュ・チョマ・シャーンドル

チョマ銅像　東京国立博物館 所蔵

多文化をささえる人びと

外国人集住地域のまちづくりの課題
――保見団地の取り組み

愛知県豊田市郊外に位置する保見（ほみ）団地は、人口９０００人のうち４０００人を外国人が占める国際団地である。
生活習慣や文化の違いを越えて、外国人と日本人のよりよい共生を目指す、
保見団地の住民が発信するさまざまな取り組みを紹介する。

野元（のもと） 弘幸（ひろゆき）
首都大学東京准教授

多文化共生にかかわる四つのＮＰＯが活動するが、センターは団地中央に事務所と活動スペースを有する事業型ＮＰＯで、日系人の生活支援・生活相談、情報提供のほか、日系人児童・生徒の補習教室・母語学習支援などの教育活動をおこなっている。

センターの活動の特徴は、外国人の居住を問題ととらえるのではなく、まちに新しい力と可能性をもたらすことに注目し、まちづくりの視点を重視している点にある。

たとえば、高齢化が進む保見団地の中央にあるスーパーは、車を運転できる人がいない高齢者世帯にとって、食料品や生活必需品を買うためになくてはならない店となっている。しかしそのスーパーが団地に住む若い日系人住民の購買力によって支えられているという実態もある。日系人の居住が、高齢者を含む地域住民の消費生活と深く結びついているという視点からまちづくりに取り組む方法を模索中である。

ヘルパーの資格を取得する日系人

また、高齢者の介護については、団地に住む日系人のヘルパーが地域の日本人高齢者にサービスを提供するという可能性も生まれている。実際に外国人労働者に頼らざるをえなくなっている介護の分野において、日系人でヘルパー資格をとって福祉分野で就労しようとする人が増えている。センターは、二〇一〇年三月から愛知県高齢者生活協同組合と協力して、保見団地で厚生労働省の緊急人材育成基金によるヘルパー講座を実施しているが、すでに多くの日系人が卒業し、福祉分野で就労している。このヘルパー講座の卒業生たちが中心となって、団地内に在宅介護サービスの事業所を開設する動きもあり、日系人の居住が地域福祉の充実に結びついている。

日本人社会との関係改善において、いま明るい話題がある。ブラジルにおいて、二〇一四年にサッカーワールドカップ、二〇一六年にリオデジャネイロオリンピックが開催されることだ。スポーツの祭典ともいえるふたつの大きな大会に多くの日本人が出かけることは間違いないが、それらの人たちが、日本国内でブラジルの文化に触れ、ポルトガル語を学ぶべく保見団地を訪れることもあろう。これはきっと保見団地のまちづくりに明るい材料を提供してくれるにちがいない。

日系人が集住する国際団地

保見団地に暮らす外国人住民のほとんどは、一九九〇年の入国管理法改正以降に来日した日系ブラジル人・ペルー人で、自動車関連の工場で働く人が多い。

これだけ多くの外国人が集住すると、生活習慣や文化の違いから日本人住民とのあいだにさまざまな摩擦や軋轢（あつれき）が生じるのは当然である。ラテン系の人たちは家族のつながりが強く、遠方に住んでいても週末には家族や親戚で集まり、夜どおし歓談することが多い。しかし、こうした文化は地域の日本人住民の理解はなかなかえられず、「騒音」として苦情処理されることがしばしばである。また、ことばが通じないことによるトラブルも深刻である。ごみ集積所やエレベータ内の表示などポルトガル語と日本語のバイリンガル表記となっているところが少なくないが、それでも住民相互の意思疎通は難しい。

地方自治体は、こうした摩擦や軋轢をやわらげるべく、国際交流活動や日本語学習支援を地域で積極的に展開しようとする。しかし、ここ保見団地では、県や市の行政施策や地域支援策が十分ではなかったために、問題が深刻化し、外国人住民に対する差別や偏見が生まれているのが実情である。

共生を目指すＮＰＯ活動

特定非営利活動法人保見ヶ丘ラテンアメリカセンター（以下、「センター」）は、保見団地が抱える課題である外国人住民と日本人住民の共生を目指して展開するＮＰＯのひとつである。保見団地では、育つこともきっと可能であろう。センターが主催する放課後学習支援教室は、そうした思いから生まれたもので、現在、一五名の日系人小・中学生が放課後にセンターに通い、学校の宿題を終わらせたあとに母語教育を受けている。

コミュニティのきずなとして、そして将来への資産として母語を身につけたる子どもたちが育つことを楽しみにしている。

日系の子どもたちの学習支援

日系人の集住地域がもつこうした可能性について、もっともセンターが期待しているのが、日系人の子どもたちをバイリンガルに育てる活動である。日系人の子どもたちの約三分の二は、現在、地域の公立小中学校で学んでいる。しかし日系人であることを理由にいじめにあったり、祖国やその文化を知らないため自分自身がブラジル人やペルー人であることに誇りをもつことができない状態にある子どもが多い。

こうした子どもたちには、日本の公立小中学校で日本人の子どもたちと学びながらも、ブラジルやペルーという国の本当の姿と可能性について知り、母語もしっかりと学ぶことが必要だ。日本とブラジル・ペルーの架け橋となれるような人材に

派遣切りにあった労働者の支援活動の様子

保見団地

バイリンガル表示

失業者のための日本語教室

CALENDAR 三月 第36回

歳時世相篇

ディスカヴァリーデー
マゼランに「発見」されたグアム島

印東道子（いんとうみちこ）
民博 民族社会研究部

島の各地で繰りひろげられる多様な催し。華やかにみえるその表舞台の背後には、先住民と西洋の出会いがもたらした複雑な関係が見え隠れしている。

上陸の地

ミクロネシアのグアム島では、現在、三月の第一月曜日はディスカヴァリーデーという祝日になっている。一五二一年三月六日に、ポルトガル人フェルディナンド・マゼランが、グアム島を「発見」して上陸した日にちなんで祭りがおこなわれる。

一九二六年にこの祭りが始まった当初はマゼランデーとよばれ、マゼランが上陸したといわれるウマタック村を中心におこなわれていた。その後、この日はグアム島の正式の休日になり、マゼランデーからディスカヴァリーデーへと名称が変化し、ウマタック村を中心に各地で音楽やダンス上演やコンテストなど、多様な催しが開催されている。

ところが、ウマタック村がマゼラン上陸の地ではない可能性を指摘した論文が、一九八九年に発表された。航海日誌に書かれた航海距離や、船から見えた島影の特徴などが詳細に検討された結果、ウマタックよりも北のアガナやタモン湾に上陸した可能性が高いという。一九二六年以来、マゼラン上陸を記念した石柱を海岸に立てて観光スポットとしてきたウマタック住民にとっては思いがけない指摘であったが、マゼラン上陸の地を他の町にゆずる気配は今のところない。

実際、ウマタック村は、先住民であるチャモロの伝統的居住地としては規模が大きく、村の北にあるファウハとよばれる大きな岩は、この世を創造した兄妹神の妹が身を投げてできたと伝えられ、毎年、ここで祭りが開かれていた。また、一七世紀に当時スペインの支配下にあったメキシコのアカプルコとフィリピンとのあいだでおこなわれた、ガレオン船貿易の中継地として使われた際には、スペイン人の居住域が設定され、大きな教会を有するキリスト教区がもうけられるなど、豊かな村として栄えた歴史をもつ。「マゼラン上陸の地」という観光資源をそう簡単に手放すわけにはいかないわけだ。

悲劇的な出会い

そもそもディスカヴァリーデーを祝うことに対しては、チャモロの人びとからは強い反発が示されてきた。人びとにとって、グアムはマゼランによって「発見」されたのではなく、自分たちの祖先が発見して暮らしてきた島である。考古学からは、紀元前一五〇〇年にはすでに土器を作る人たちが暮らしはじめていたことが明らかになっている。一八九八年にスペインからグアムを購入して以降、米国がグアムを領有している現状においては、グアムのディスカヴァリーデーはきわめて西欧中心的な記念日とも位置づけられる。

さらに、マゼランとチャモロとの出会いは決して友好的なものではなく、チャモロにとっては悲劇的な出来事だった。一五二〇年一一月に南米南端のマゼラン海峡を抜け、ヨーロッパ人としてはじめて太平洋を航海したマゼラン一行は、三カ月ものあいだ、水や食料を補給できる島を見つけることができず、三月にグアム島にたどり着いたときには、多くの乗員が壊血病に苦しみ、飢え死にする一歩手前の状態だった。

沖合に停泊して上陸準備をしていたマゼランの船は、島からこぎ出してきた二〇〇隻以上ものアウトリガーカヌーに取り囲まれた。次々に甲板にあがってきたチャモロたちは、船上で見つけた鉄などを手当たり次第にもち去り、上陸用に準備されていたボートまで奪って逃げていった。怒ったマゼランは、このボートを取り戻すために兵士の一団を上陸させ、報復として家を焼き払い、七人もの男たちを殺害した。

これが、マゼランとチャモロとの出会いの真実であり、チャモロの人びとがディスカヴァリーデーとして祝いたくなるものでは決してなかった。ディスカヴァリーデーの目玉としておこなわれる寸劇では、マゼランたちが島に上陸して村人を殺害する様子が再現される。この劇を上演することは、グアム島の先住民がだれであるかを表現し、さらには現在の米国支配にまでつながる被支配の歴史の原点を強調することにつながる。

観光と保存

現在では、ディスカヴァリーデーに続く一週間が「チャモロウィーク」とされ、チャモロ文化を学ぶイベント類が毎年用意される。背景には、先住民であるチャモロへの配慮が感じられるが、チャモロ文化の観光資源化へとつながる行事であることは明らかだ。それでもチャモロの人びとにとっては、ラッテとよばれる巨石建造物見学や伝統的なカヌー作りなどを紹介するイベントをおこなうことによって、グアム島の先住民の存在や伝統文化の継承をアピールする機会にもなっている。

このように、グアムでおこなわれるディスカヴァリーデーの裏には、マゼランとチャモロとの悲劇的な遭遇の歴史、グアムの先住者がだれであるか、伝統文化の観光資源化と保存運動などが複雑に見え隠れする。

現在もウマタック湾に立つマゼラン上陸記念碑（2006年撮影）

フィールドで考える

もうひとつのフィールド

緒方（おがた）しらべ
総合研究大学院大学博士後期課程

降りつづける雨、照りつける日差し、鳴りやまないクラクション。バスを乗り継いで、バイクタクシーにまたがって、でこぼこの道を歩く。通りを行く人たちとの際限ない挨拶、店番のおばさんの掛け声、住宅地で遊ぶ子どもたちの騒ぎ声。ナイジェリアの地方都市イレ・イフェでアーティストたちを訪ね歩くこと、それがいつものフィールドワーク。看板、広告、絵画、彫刻、版画、ビーズ細工、壁画、染織、陶芸など、さまざまな「アート」を手がける数十人のつくり手たちの仕事場や自宅を訪れる。彼らにインタビューをして、作品の制作過程を記録したり、お客さんとのやりとりを見つめる。家族や近所の人たちと話をして、日常のたわいない出来事を書きとめる。雨の降りやまない日には、雨足が遠のくのを何時間でも待ってやっと出かける。つくり手の数、作品の種類、「アート」のいろいろ、街の広大さ、そして遅々としてすすまない調査――どれをとっても、フィールドは果てしなく広い。

筆者のフィールド、ナイジェリアの地方都市、イレ・イフェ

いつものフィールドを離れて

雨季真っ盛りのナイジェリアをあとに帰国すると、日本は一滴の雨つぶさえ落ちてこない猛暑のお盆。そのころ、わたしが所属する大学院の研究科がおかれている民博は特別展の開幕を目前にひかえていた。二〇一〇年九月から一二月まで開催された、『彫刻家エル・アナツイのアフリカ』。この展示は二〇一一年二月から同年八月にかけて、神奈川、山形、埼玉の美術館を巡回する。これまで、アフリカン・アートの展覧会といえば、数名のつくり手たちの作品を「アフリカ」としてひとくくりに展示することがほとんどであったから、ブラック・アフリカの特定のアーティストの作品がこれほどの規模で展示されるのは、日本はもとより、世界でもはじめての画期的な試みだろう。この展示を企画した民博の川口幸也実行委員長は、すでに一五年まえに着想し、二年まえから具体的な準備をはじめていた。その最後の七日間、わたしは撮影担当者として展示場で過ごす機会にめぐまれた。

屋外で大型の木彫を制作するイレ・イフェの木彫家たち

白い壁に囲まれた場所

開幕七日まえ、作品の詰められたいくつもの木箱が開かれると本格的に設営がはじまった。「博物館」が「美術館」に変身したかのような錯覚をおぼえさせる白い壁と床。ひときわ目立つブルーシートのうえを、搬入・設置スタッフ、内装スタッフ、そして実行委員たちがあわただしく駆けまわっている。現場に立ち会う展示担当の職員や特別展準備室のスタッフも、その動きを見守りながら、適宜、手を貸す。小さな金属片がつなぎ合わされてできた巨大な彫刻を、何人ものスタッフが全身で支えながら、少しずつ、白い壁に掲げてゆく。来日していたエル・アナツイ氏の指示で、「金属の布」にひだがよせられる。やり直しをくり返しながら、ひだはねじで慎重に固定された。それらはすべて、アナツイ氏がこの空間でのみ思い描いてかたちにした唯一のものばかり。次の会場へ行っても、まったく同じかたちは創りだされない。作品を説明するパネルやラベルの位置も、そこに当てられるライトの向きも、ひとつひとつ、正確に定められていく。

作業４日目、展示空間がしだいに創られていった

背後から出される指示の声、真横であがる掛け声、響きわたる電動ドリルの音。頭上で行き交う脚立、床に散らばる軍手、ちぎれた銅線、端に寄せてある木箱と大工道具。白い壁で囲まれた慣れない場所で、カメラを抱えたわたしの足もとはおぼつかない。不安にすらなるこの空間で、川口実行委員長にたずねてみた。

「抜け出したくなりませんか？ ここでずっとそうしていらっしゃって……」

「え？ 全然そんなことない。これがフィールドワークみたいなもんだから。会議で座ってるよりよっぽどいいよ」

そこにずっといても平気そう、というよりは、そこでこそ生気に満ちている様子で即答が返ってきた。そしていつの間にかわたしは、たしかな緊張感を感じながら、ファインダーに目を押しあててこの現場を撮りつづけていた。

アナツイ氏、川口実行委員長、展示スタッフが作品を設置する

そこにも

狭くて白かった場所は、緊迫した空気のなかで、日を追うごとに色彩を帯びていった。彫刻の凹凸と照明がつくる光と影、アーティストと作品の背景描写で、空間はふくらんでいった。そこにはいつも物音が、人の声が、響いていた。多くの人たちによって展示場は創られていった。そこを生き生きと駆けめぐる人びとの姿に、わたしはもうひとつのフィールドを見た。

3月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間　14 時 30 分から 15 時 30 分（3月6日を除く）
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※特別展開催中のウィークエンド・サロンでは 13 回にわたりみんぱくの名誉教授が初代館長・梅棹忠夫についてお話しします。

6日（日曜日）

時間 :13 時 30 分から 14 時 30 分
話者 : 齋藤晃（国立民族学博物館 准教授）
話題 : アマゾンのゴムブーム
場所 : 本館展示場内ナビひろば

20日（日曜日）

話者 : 加藤九祚（国立民族学博物館 名誉教授）
話題 :【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
　　1981年12月、梅棹先生ご夫妻のお供をした
　　モスクワ・中央アジアの旅
場所 : 本館展示場

27日（日曜日）

話者 : 松澤員子（国立民族学博物館 名誉教授）
話題 :【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】
　　創造的知的生産の技術の確立をめざした梅棹先生
場所 : 本館展示場

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

弥生三月、心浮き立つ季節ではあるが、例年の数倍の花粉が飛散し始めており（これも人為のツケ）、花粉症に縁なしと豪語していたわたしも注意せねばならぬ。多くの方々を苦しめてきた、昨夏の猛暑、今冬の豪雪、口蹄疫や鳥インフル、噴火、等々、あらためて自然は人智のおよぶものではないことを知らされる。とはいえ、これも今後も数十億年続くとされる地球史のほんのひとこまなのかも知れぬ。

こうした、諦観も含むズームアウトした見方は、梅棹さんにもあったのではないだろうか。距離を置いて見るからこそ、全体像を過不足なくとらえ、細部にとらわれないグランドセオリーを次々と打ち出されたように思える。3月10日開始の特別展は、こうした知の世界を知る機会になるだろう。（久保正敏）

先月号（2011年2月号）2ページの標本資料名に誤りがありました。
（誤）「土鈴（鬼よろず）」→（正）「土鈴（鬼ようず）」
お詫びして訂正いたします。

●表紙 : 創設に先立つ1973年2月発行の『国立民族学研究博物館＜仮称＞設立計画』パンフに掲載されたイメージ。上から「共同研究室」「収蔵庫」「視聴覚ブース」

次号の予告

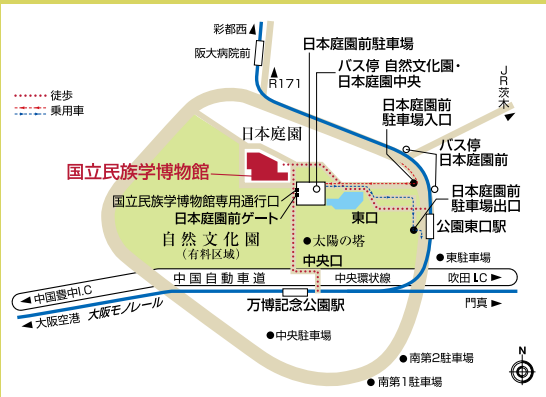
特集
耳よりの話

月刊みんぱく　2011 年 3 月号
第 35 巻第 3 号通巻第 402 号　2011 年 3 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　朝倉敏夫　樫永真佐夫
　　庄司博史　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/